

妓王寺は浄土宗にして往生院となづく、いにしへは西の山上にあり、後世今の地にうつす。本尊は阿弥陀仏にして、脇士は観音勢至なり。清盛入道浄海の塔、祇王（廿歳）祇女（十九歳）仏（十七歳）刀自（妓王妓女の母四十五歳）の塔も、庵室の南にあり。

平家物語

入道相国いかにも叶うまじき由しきりに給ふ間、はき拭ひちりひろはせ出べきにこそ定めけれ。一樹の

蔭にやどりあひ、同じ流れを結ぶだに別れはかなしきならひぞかし、いはんや是は三年があひだ住馴しところなれば、なごりもおしくかなしくてかひなき涙ぞす、みける。はてしもあるべき事ならねば、祇王いまはかうとて出けるが、なからん後もわすれがたみにもとや思ひけん、障子になくく一首の歌をぞかきつけ、る。

もえ出るもかる、も同じのべの草何か秋にあはではつべき

祇

王

平相国は祇王に超たるはあらじと寵侍る、家鶏を軽んじて野雉を愛し、又朝槿を逐ふこゝろありて、仏の前を挙しかば、一首を遺してこゝに隠る。綾の錦の粧をまとをに織れる藤衣にかへたり、仏も我身のうへの秋をもまたず、此庵に来つて四人とも道心堅固にすましけり。まことに目出度義女なりけり。